

小学生の防犯能力の測定、評価に関する予備的研究 ～誘拐防止を中心とした先行研究の分析～

西岡伸紀¹⁾、武藤孝司²⁾、衛藤隆³⁾、刈間理介³⁾、
越智啓太⁴⁾、村上元良⁵⁾、藤田大輔⁶⁾

- 1) 兵庫教育大学、独立行政法人科学技術振興機構、RISTEX
- 2) 獨協医科大学、独立行政法人科学技術振興機構、RISTEX
- 3) 東京大学、独立行政法人科学技術振興機構、RISTEX
- 4) 法政大学、独立行政法人科学技術振興機構、RISTEX
- 5) 京都府教育委員会、独立行政法人科学技術振興機構、RISTEX
- 6) 大阪教育大学、独立行政法人科学技術振興機構、RISTEX

Preliminary Study on Measurement and Evaluation on the Ability of Elementary School Children for Crime-Prevention: Analysis of Previous Studies on Abduction Prevention

Nobuki NISHIOKA¹⁾, Takashi MUTO²⁾, Takashi ETO³⁾
Keita OCHI⁴⁾, Motoyoshi MURAKAMI⁵⁾, Daisuke FUJIA⁶⁾

- 1) Hyogo University of Teacher Education, JST, RISTEX
- 2) Dokkyo Medical University School of Medicine, JST, RISTEX
- 3) The University of Tokyo, JST, RISTEX
- 4) Hosei University, JST, RISTEX
- 5) Kyoto Prefecture Board of Education, JST, RISTEX
- 6) Osaka Kyoiku University, JST, RISTEX

要約

本研究では、小学生の防犯能力の測定、評価方法を明らかにするために、小学生や幼児に対する防犯教育の評価研究及び犯罪等のリスクの認知に関する資料を収集し、そこで使われている測定、評価の項目、評価方法を整理した。

具体的方法としては、crime, victimization, prevention, ability, children, evaluation, index, stranger dangerなどをキーワードとして、PubMed、医中誌により最近20年間の文献を収集した。対象は、小学生、幼児とし、防犯教育評価及び防犯に関わるリスク認知に関する資料を選択した。

その結果、項目としては、誘われた場合の対処行動や対処の仕方、不審な電話への対処の仕方、提示された状況の危険性に対する評価、日常生活上の不安などが挙げられた。評価方法としては、シミュレーション場面での行動観察、子どもたちへのインタビューや個別の質問が多く認められた。ロールプレイングにおける行動観察も少数見られた。

そのうち、シミュレーション場面での行動観察は極めて妥当性が高いが、実行可能性には問題があると考えられた。ロールプレイング場面の行動については、反対意見が少ないものの場面の作為性を子どもがわかっていること、両場面の行動とインタビュー等での自己報告の行動との相関は低いことが問題と考えられた。

キーワード：小学生、防犯能力、測定、評価、誘拐防止

Key Words : elementary school children, ability for crime-prevention, measurement, evaluation, abduction prevention

1 緒言

近年、栃木県、広島県、兵庫県などにおいて小学生の殺傷事件が相次ぎ、その安全確保が重視されている。警

察庁によれば¹⁾、2007年における小学生の刑法犯被害は10万人当たり347.57であり、その内訳は、窃盗309.06、強制わいせつ10.47、暴力9.41、傷害3.98等であった。ただし、刑法犯被害に到らない事例を含めると高率となる。

例えば、科学警察研究所による神戸市内の小学校1～6年生2686人を対象とした調査によれば²⁾、小学校入学以降の被害経験率は、追いかけて5.1%、暴力4.9%、盗難4.0%、誘い2.3%、カツアゲ1.6%、痴漢1.5%、その他（その他の怖いことや嫌なこと）3.5%であり、以上のいずれかの経験率は15.3%に上った。また、窃盗が大半を占めた警察庁統計と異なり、追いかけて、暴力、誘いなどが多かった。

このような社会情勢から、学校における防犯教育の充実が図られている。例えば、2007年における学校での防犯教室の実施率は、小学校95.8%、中学校78.9%であり、小学校では特に高かった³⁾。また新学習指導要領によれば、小学校、中学校の保健学習では、防犯に関わる内容が新たに取り上げられており、小学校では、犯罪が起りやすい場所を避けること、犯罪に巻き込まれそうになったらすぐに助けを求めることなどを取り上げている⁴⁾。このように防犯教育の実施状況が高まっているが、教育の質の向上のためには、プログラムの開発、実施、評価を重ねる必要がある。

そのうち、プログラムについては、内外様々な内容や教材が開発されている。しかし、評価研究は少ない。例えば、Bruceらは⁵⁾ 傷害防止の介入研究をレビューしているが、その中で不審者対応に関する研究は1件のみであった。またThompsonらは⁶⁾、傷害防止の介入やプログラムの評価指標として、知識・態度・行動、自己効力感、変容ステージ、認知・行動・環境要因等を挙げているが、防犯教育に特化した項目は認められなかった。さらにGielenらは⁷⁾、傷害防止のための評価方法には、質的方法として、インタビュー、フォーカス・グループ、質的観察法等が、量的方法としては、観察法、対面調査法、電話調査法、配布法、郵送法、インターネット調査法等があるとしているが、やはり一般的なものであった。

また、子どもの防犯能力に関する研究も少ない。内田は⁸⁾、子どもの危険状況の認知の発達心理学の観点から体系的に検討した研究は未だ少ないとしている。Finkelhorも⁹⁾ 被害を発達段階から見る研究領域が必要と述べている。また、藤井らが安全能力の概念や構造について提案しているが¹⁰⁾、やはり防犯能力に特化したものではない。したがって、防犯能力に関する子どもの発達の知見は十分には得られていないと言える。

以上のことから、本研究では、防犯教育評価に関する基礎的情報を得るため、小学生に対する防犯教育の評価研究及び犯罪等のリスクの認知に関する資料を収集し、そこで使われている測定、評価の項目、評価方法を整理した。

2 方法

まず、crime, victimization, prevention, ability, children, evaluation, index, stranger dangerなどをキーワードとして、PubMed、医中誌により最近20年間（1988年～2007年）の文献を収集した。さらに、追加のため、傷害防止研究のデータベースであるSafety Litにより最近1年間の文献を収集した。対象は、小学生、幼児とし、防犯教育評価及び防犯に関わるリスク認知に関する資料を選択した。また、資料中の引用文献から関連が強いものを収集した。その結果、24点が収集された。資料は、調査対象、測定、評価の項目、評価方法の点を中心に分析した。

3 結果

資料は、対象、プログラム等の内容、項目、方法について整理した（表1）。

項目としては、誘われた場合の対処行動や対処の仕方、不審な電話への対処の仕方、提示された状況の危険性の評価、日常生活上の不安などが挙げられた。評価方法としては、シミュレーション場面での行動観察、子どもたちへのインタビューや個別の質問が多かった。ロールプレイングにおける行動観察も少数見られた。

1) シミュレーション場面での行動観察

シミュレーション場面での行動観察は、米国North Dakota州立大学の20年以上の一連の研究で使われている。Miltenbergerら¹¹⁾、Johnsonら¹²⁾、Olsen-Woodsら¹³⁾の研究では、誘拐防止のためのBehavioral Skills Training (BST)による実地訓練等を行い、その評価として行動観察が行われた。子どもが声かけをされるシミュレーション場面での行動を個別に観察した。そこでは、保護者の同意を得た後、子どもの自宅の庭、学校や家の近くの歩道、ショッピングモールなどで、子どもには面識のない不審者役が、子どもたちを誘った。その際、犯罪被害統計の分析結果から、誘い方は、代表的なパターンである「散歩などの単純な誘い」「親や教員などの権威的な立場を利用した誘い」「子どもたちに魅力的なものを使う誘い」「助けを求める誘い」が用いられた。また、子どもに求めた行動は、「Noと言う」「逃げる」「大人に知らせる」であった。類似の方法はLuriaら¹⁴⁾も用いていた。Luriaらは、不審者対応については、「逃げる」「先生か他の大人に知らせる」「車に乗らない」「その人に隠語をたずねる」「その人に近づかない」を目標行動としていた。

2) インタビューや個別の質問

これらは、表1の全ての研究が使っていた方法である。いずれも子どもに対して個別に行われていた。

上記のNorth Dakota州立大学の研究では、対処の仕方や場面の危険性について、絵を提示したり人形を使ったりしながら子どもにインタビューを行っていた。絵においては、「年長者が下着の中に手を入れようとしている」などの危険なもの、「水泳の指導者が子どもを浮かべるため補助している」などの安全なものを複数個ずつランダムに交えていた。また、Wardenら¹⁵⁾は、場面を絵で具体的に提示しながら、危険性について子どもたちに質問していた。具体的場面としては、場所、不審者の人数や子どもたちの人数等考慮して、安全な場面、危険な場面等から各複数パターンをランダムに選んだ。その際、場面提示では、4つの状況（いじめ、不審者、不適切な親密な関係、秘密の強制）、2パターンの誘い方（一般的誘いと依頼）、5つのバリエーション（誘う側や誘われる側の人数や構成を変更）を組み合わせて提示した。さらに、Hardenら¹⁶⁾は、子どもの日頃の恐怖や不安等をインタビューにより評価させた。そこでは、一覧表、文章完成法、分類、spider diagram（危険であることや危険でないことになどに相当する事柄を空欄にかかせる）などを用いていた。日本においては、江尻ら¹⁷⁾が、Wardenらの研究を参考に、場面提示では、未知あるいは既知の男性から、魅力的な誘い（子犬、手品、風船など）を受ける場面を提示し、対処の仕方やその理由をたずねていた。

3) ロールプレイング

Miltenbergerら¹¹⁾は、研究補助者が、子どもにロールプレイングの行い方を説明した後、同補助者が不審者役となり、7つの危険な場面から2つをランダムに選び、誘った場合どのように対処するかを子どもにロールプレイングさせ、その際の行動を評価した。例えば、子どもが一人で店にいる時に、不審者が近づいてきて子どもをほめた後、プレゼントを暗示し車に誘うようなものである。適切な対処としては、嫌だと言う、10秒以内にその場を離れる、他の人に会ってから10秒以内にできごとを話すとしていた。またLuriaらは¹⁴⁾、一人で在宅の場合の不審電話への対応についてロールプレイングを行い、その対応結果を評価した。具体的には、保護者の知り合いのふりをしてかけられた電話に対応することを求めた。状況は、保護者の在宅状況を尋ねた場合、自分の名前を尋ねられた場合、届け物をしたいが住所を忘れたので教えて欲しいと求められた場合とした。そして、いずれに対しても応えないことを適切とした。

4 考察

シミュレーション場面での行動観察は、誘った場合の子どもの反応を直接測定するもので、極めて妥当性が高いと言える。ただ、本方法の実行可能性には問題がある。North Dakota州立大学の研究では、保護者に参加の同意を得る、単なる測定に留まらず、測定後には、子どもが対処スキルを完全に習得できるまで、教授、モデリング、リハーサル、賞賛、フィードバックを使って繰り返しトレーニングを行うなど、十分に配慮されていた。さらに、測定の影響を調べるため、測定後に子どもが見知らぬ人や目新しい状況に怯え、動揺、警戒などを持つようにならなかったかを調査した。加えて、保護者の研究への満足度を調査した。以上の多面的調査から、問題が発生しなかったとしている¹¹⁾。一方、一部の保護者が児童の測定への参加を拒否したり、測定場面での子どもの不安感が増大したりするなどの問題が発生した例も報告されている¹⁸⁾。

一方、ロールプレイングやインタビューは、上記行動観察に比べ実用性は高いものの、妥当性は低いと考えられる。Carroll-Rowanら¹⁹⁾、Olsen-Woodsら¹³⁾は、シミュレーション場面の行動測定、ロールプレイングでの行動測定、インタビュー等による対処行動の関係について検討している。それによれば、シミュレーション場面の測定は現実場面に近いが、実施には賛否両論あること、ロールプレイング場面の行動については、反対意見が少ないものの場面の作為性を子どもがわかっていること、両場面の行動と自己報告の行動との相関は低いこととされている。ただし、ロールプレイングとインタビューについても、測定方法として実際にいられていることから、ある程度の評価は受けていると考えられた。

ところで、小学生の防犯能力の測定、評価では、発達段階からして、具体的場面の提示が不可欠である。Hardenらは¹⁶⁾、子どもたちに対するインタビュー結果から、子どものリスクの評価には、周囲の人々の特性、特定の場所の構造、時間帯、行動が影響するとしている。本報で紹介した諸研究においても、提示場面では、場所、誘う相手の年齢、性別、人数、誘われる側の人数、誘い方等が考慮されており、多くがそれからランダムに、また研究によっては複数提示していた。さらに、子どもたちがとった行動の評価の基準が明確であった。ただ、これらの場面作成や場面提示を実現するには、子どもたちのリスク認知、ヒヤリハットや犯罪被害、それらの関連要因などの実態情報が欠かせない。今後、国内における上記のような研究が必要となる。また、海外の研究結果からこれらの情報を収集し分析することも必要であり、検討

したい。

本研究は、科学技術振興機構委託研究費（代表 大阪教育大学教授 藤田大輔、研究開発プロジェクト「犯罪からの子どもの安全を目指したe-learningシステムの開発」）を受け実施した。

参考・引用文献

- 1) 警察庁, 平成19年の犯罪情勢, 2008
- 2) 科学警察研究所犯罪予防研究室, 小学生児童の日常生活と犯罪被害—神戸市須磨区内の5つの小学校における調査結果—, 2008
- 3) 文部科学省スポーツ・青少年局学校教育研究課, 学校の安全管理の取組状況に関する調査 (平成18年度実績), 2007
- 4) 文部科学省, 小学校学習指導要領解説体育編, 東洋館出版社, 2008
- 5) Bruce B, McGrath P, Group interventions for the prevention of injuries in young children: a systematic review. *Injury Prevention*, 2005 ; 11: 143-147.
- 6) Thompson RS, Sacks JJ, Evaluating an injury intervention or program. In Rivara FP, Cummings P, et.al., (Eds). *Injury Control — A guide to research and program evaluation —*, Cambridge Univ Press. 2001
- 7) Gielen AC, et. al. *Injury and violence prevention*, John Wiley & Sons. 2006
- 8) 内田伸子. 幼児の安全教育に関する総合的研究—幼児の危険認識の発達に及ぼす社会・文化的要因の影響—, (財)セコム科学技術振興財団研究助成平成19年度研究成果報告書. 2008
- 9) Finkelhor D, Developmental victimology — The comprehensive study of childhood victimization. In *Victims of crime* (3rd ed), Sage Publications. 2007
- 10) 藤井真美, 刈間理介, 海保博之, 他. 安全能力の概念と構造. *安全教育学研究* 2007 ; 7: 3-16.
- 11) Miltenberger R G, Thiesse-Duffy E. Evaluation of home-based programs for teaching personal safety skills to children. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 1988 ; 21: 81-87.
- 12) Johnson BM, Miltenberger R G, Knudson P, et. al. A preliminary evaluation of two behavioral skills training procedures for teaching abduction-prevention skills to schoolchildren. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 2006 ; 39: 25-34.
- 13) Olsen-Woods LA, Miltenberger R G, Foreman G, Effects of correspondence training in an abduction prevention training program. *Child & Family Behavior Therapy*, 1998;20: 15-34.
- 14) Luria JW, Smith GA, Chapman JI, An evaluation of a safety education program for kindergarten and elementary school children. *Arch Pediatr Adolesc Med*, 2000 ; 154: 227-231.
- 15) Warden D. An evaluation of a children's safety training programme. *Educational Psychology*, 1997 ; 17: 433-448.
- 16) Harden J, Backrtrt-Milburn K, Scott S, Scary faces, scary places: children's perceptions of risk and safety. *Health Education Journal*, 2000 ; 59: 12-22.
- 17) 江尻佳子, 内田伸子. 幼児・児童における既知・未知人物に対する危険認知の発達—幼児の危険認識の発達に及ぼす社会・文化的要因の影響—, (財)セコム科学技術振興財団研究助成平成19年度研究成果報告書. 2008
- 18) Miltenberger RG, Olsen-Woods LA, Abduction prevention training: A review of findings and issues for future research. *Education and Treatment of Children*, 1996 ; 19: 69-82.
- 19) Carrol-Rowan LA, Miltenberger RG, A comparison of procedures for teaching abduction prevention to preschoolers. *Education and Treatment of Children*, 1994 ; 17: 113-128.

表1 収集資料の分析結果

発表者	対象	プログラム等	測定、評価項目	測定方法等
1) R.G. Miltenberger, et.al. ¹⁰⁾ 1988	4～5歳児13人, 6～7歳児11人 計24人	市販されているプログラムRed Flag等, 及び個別のスキルトレーニング	知識: 場面を見て危険の有無を回答 対処の仕方: 誘われた場合の対処の仕方 (インタビュー) 対処行動: Noと言う, 逃げる, 大人に知らせる	インタビュー, ロールプレイング: 子どもの自宅において, 場面を見せて危険の有無をたずねた。また, 誘われた場合の対処の仕方について, 言葉による説明やロールプレイングによる実演を求めた。 行動測定: 自宅の庭やショッピングセンターにおいて, 不審者役が子どもに声をかけ, その際の子どもの行動を測定した。
2) L.A. Olsen-Woods, et.al. ¹⁸⁾ 1998	4, 5歳児 計31人	BST (Behavioral Skills Training, 行動スキルトレーニング)	対処の仕方: 誘われた場合の対処の仕方 (インタビュー) 対処行動: Noと言う, 逃げる, 大人に知らせる	インタビュー: 子どもの自宅において, 保護者同席のもと, 子どもに場面を示し, 対処の仕方をたずねた。測定者と保護者が子どもの反応を記録した。 行動測定: 自宅の庭あるいは駐車場があるショッピングセンターなどにおいて, 不審者役が保護者の不在時に子どもに声をかけ, その際の子どもの行動を測定した。
3) B. M. Johnson, et.al., ¹⁹⁾ 2006	6, 7歳児 計50人	放課後に行われた誘拐防止スキルトレーニング (BST) や実地訓練	対処行動: Noと言う, 逃げる, 大人に知らせる	行動測定: 放課後プログラムを実施している学校や施設において, 不審者役が子どもに声をかけ, その際の子どもの行動を測定した。
4) J. W. Luria, et.al., ¹³⁾	園児, 小学校1年生 計230人 (介入群と対照群計)	不審者回避, 道路横断, 911コールのプログラム	不審電話への対処行動: 両親の在宅・不在, 自分の名前, 自宅住所等を伝えるか否か, 不審者への対処行動: 逃げる, 大人に知らせる, 車に乗らない, 相手が隠語を知っているかを確認する, あるいは不審者に近づかない	ロールプレイング: 不審電話に対する対応, 及び不審者の声かけに対する対応を模擬的にを行い, 評価した。
5) D. Warden, et.al. ¹⁴⁾ 1997	6歳児, 10歳児, 実験群60人, 対照群60人	グラスゴー市に導入されたKidscapeプログラム	場面の危険性: 場面を提示し, その危険性を, 安全, どちらともいえない, 危険, から選択	インタビュー: 具体的な場面を提示し, その場面での危険性を3段階で評価させた。
6) J. Harden, et.al. ¹⁵⁾ 2000	9～11歳児 (小学生) 35人, 12～15歳児 (中学生) 17人	スコットランドで行われた, 子どもたちのリスクや安全の知覚に関するインタビュー調査	日常生活の不安や心配事 親により決められた事柄への態度 自分のリスク管理 親との交渉に関する子どもの戦略	インタビュー: 危険等に相当したり関わったりする事柄について, 一覧表, 文章完成法, 分類, spider diagram*など使用し, 挙げさせた。 *クモの胴体に当たる箇所に「危険」, 「危険でない」など書き, それに当たる具体的な事柄を, クモの足に当たる箇所に書く。
7) 江尻佳子, 内田伸子 ¹⁶⁾ 2008	保育園年児: 43人, 同年長児: 43人, 小1: 42人, 小2: 38人 計166人	幼児・児童の既知・未知人物に対する危険認知の発達に関するインタビュー調査	対処行動: ついて行かない 行動選択の理由: その行動をとる理由 (個人の欲求や興味, 社会的ルール, 人物に対する既知の程度や危険性)	インタビュー: 帰宅時の場面を紙芝居として提示・説明し, その際の対処の仕方, 及びその理由をたずねた。